

学・献・遊

遊びは仕事、仕事は遊び  
遊びは仕事、仕事は遊び  
仕事は遊び、遊びは仕事  
仕事は遊び、遊びは仕事  
遊びは遊び、遊びは遊び  
遊びは遊び、遊びは遊び

大浦総合研究所

大浦勇三 著

ビジネス梁塵秘抄(一)

# 目次

はじめに

第一部

〔遊〕

遊びをせんとや生れけん

第二部

〔献〕

仕事をせんとや生れけん

第三部

〔学〕

学びをせんとや生れけん

はじめに

平安時代末期、「梁塵秘抄(りょうじんひしょう)」という歌謡集が編まれました。平安時代末期は、日本の歴史の中でも先が見えない激動の時代でした。編者は後白河法皇で一八〇年前後のものといわれます。書名の「梁塵」は、その歌で梁(はり)の塵(ちり)も動いたという故事からとられました。

多くの歌が七五調四句や八五調四句、さらには五七五七七の調子など、さまざまなバリエーションからなります。

通常、「梁塵秘抄」といえば、

**遊びをせんとや生れけむ、戯れせんとや生れけん、  
遊ぶ子供の声きけば、我が身さえこそ動がるれ。** (岩波文庫版)

が有名です。

現在、日本をとり巻く環境は、平安時代末期に負けず劣らずの大変革期にあり、その規模はグローバルな広がりを持っています。グローバル規模の動きになればなるほど、あらためて日本の文化風土、日本人の特性が一段と問われることとなります。

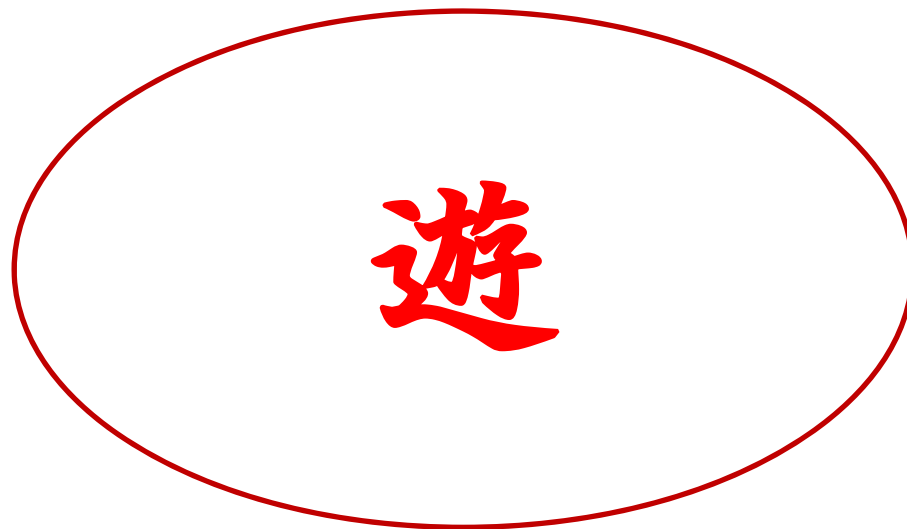
この二〇年、日本はなかなか前に進めず、ある意味で後退を余儀なくされましたが、「後ろ向きで前に進む」ことには限界があります。前へ進もうとする以上、きちんと正面を向く必要があります。平安時代の日本人は、乱世の中で的人生を「遊び」「戯れ」と肚をくくり、難題や障害と真正面から向き合い、それを乗り越えて生き抜いてきました。

二二世紀の我々も、この文化風土と特性をもう一度再認識し、覚悟を決めて思いを深め、生活と仕事に希望と喜びを見出していききたいものです。

本書は、仕事を通じて少しづつ抽斗(ひきだし)にため込んできたものを、真つ平御免の何でもありの形式で纏めたものです。しかし、文学的素養などの力不足はいかんともし難く、お手本の「梁塵秘抄」とは比べることが憚れるレベルの内容になってしまいました。ただ、「遊(遊び)」「献(仕事)」「学(学び)」に対する思いの深さだけは忘れず、無我夢中でまとめたことだけはお汲みとりいただき、なにとぞご寛恕いただければ幸いです。

東京・芝にて

大浦 勇三



遊  
び  
を  
せ  
ん  
と  
や  
生  
れ  
け  
ん

平安時代末期、その時代の下層階級を中心とする人たちの必死に生きる哀愴が、当世風(今様)の俗謡、民謡、和讃などの形で広範囲に謡われました。現在まで発見されているものは、「梁塵秘抄」の巻一の断簡、巻二の全簡、「梁塵秘抄口伝集」の巻一の断簡、巻十の全簡などになります。多くの人間の腹の底からの思いは宙に漂ったままですが、一方で残された中から感じる生身の人間の生きるエネルギーには、ただならぬものを感じます。乱世を、定められた運命と受け止め、その中で自分なりに生き抜こうとする強い覚悟が伝わってきます。それは、時代を超えたものであり、我々にも生きる勇気を与えてくれます。その思いのもとに、「遊」の九十文の中から、抜粋して三つを紹介させていただきます。

**世の中は地獄の上の花見かな、と小林一茶 葛飾北斎の心情とそのまま重なる  
絵を描くことしか眼中にない人間の覚悟と泰親 七〇歳までの絵はすべて否定  
九〇回も転居し、画号は三〇回も変えた 九〇歳を超える年齢まで頂点を追う  
小布施でも 目覚めた床の上で、毎朝三枚の獅子図を描く、その遊び心と執念**

一茶が受け止めた心情は、そのまま葛飾北斎にも重なります。一〇〇歳まで生きれば、絵の何たるかを感じ得るとの執念も及ばなかった。その無念を感じつつも、貧しさをものともせず、やりたいこと一筋に生き抜いた人間としての見事さには感服するのみです。

**過去から学び、理解を深めつつ未来を開く 正解は一つとは限らない  
ダーウィンが、ヴァイゲル号に乗ったのは二〇歳 種の起源は五〇歳  
最初から、完璧であるはずがない ただ、研究領域は狭く限定せず  
専門内外の理論や知識を、広範・食欲にとり込み 仮説を磨き続けた**

ダーウィンの仮説は、最初から一〇〇点満点であったはずはなく、生涯、仮説を磨き続けました。専門領域だけに限定せず、広範囲の知に好奇心をたぎらせ、仮説の深化に執念を燃やし続けました。批判をものともせず、自分が得心できるかどうかの唯一点でした。

**宗教 ありがたいが最初はとつきにくい 成り立ちを少し知ると親近感がわく  
法然、大切なことを深く 親鸞、大切なことを易しく、蓮如、大切なことを広く  
罰当たり覚悟の言 法然は研究開発、親鸞はモノづくり、蓮如はマーケティング  
平生即辞世、と松尾芭蕉 人間の価値だけは下げないように、平生から心掛ける**

現在の過酷な時代の中で、宗教というものの存在を一人一人が強く意識するようになりました。宗教もまた、時代の産物だとすると、法然、親鸞、蓮如に深く学びながらも、今の時代の形と内容を、新たに創造していくことが課せられているように感じます。

献

仕事をせんとや生れけん

平安時代末期、当時の高度な文化として上層階級では和歌が盛んだったと言われます。歴史上、正当な文化として教えられてきたのは、きらびやかな和歌の文化です。しかし、それは表の歴史・文化であり、表があれば必ず裏もあります。そして、肚をくくり地を這って生き抜いた人間の歴史は裏側にあります。そこにこそ、生身の人間の生きる思いとエネルギーが籠っています。農民、商人や遊女など、それぞれに天命と受け止めた生業に身体を張り、命を賭けて生きたことを、強く感じざるを得ません。乱世の中では、いつ命を落とすかもしれない我が身を覚悟しながら、その中で見事に人生を全うしました。

その思いのもとに、「猷」の九十文の中から、抜粋して三つを紹介させていただきます。

**一九二九年の世界大恐慌は 何をどうしたらいいのか、誰にもわからなかった  
大事なことは、何があっても逃げず信じる どんな馬でも、千里走れば、名馬  
新技術、新素材、新製品の開発 それに加えて人材育成や契約の仕組みづくり  
世も末と思われた大恐慌時代 これだけの新しいものが、次々に誕生している**

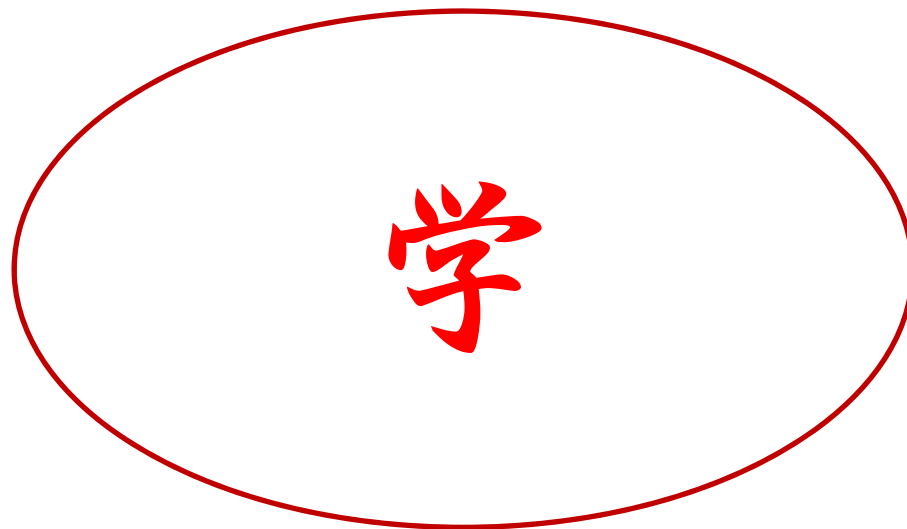
現代は、世界大恐慌の再来との声も聞くようになり、閉塞感是一段と強くなっています。しかし、前の大恐慌でも、人類は時代環境を冷静に覚悟をもって受け止め、新たな未来を見据え、前向きにイノベーションに立ち向かい、その後の大きな繁栄につなげたのです。

**グローバルビジネスは各国が強みを發揮 フランス人は独創性と想像力  
ドイツ人は堅実さと手堅さが身上 イギリス人はグローバルな戦略立案  
アメリカ人はマーケティング 日本人はきめ細かさとチームワーキング  
アジアの国も、それぞれ得手をもつ 相互補完の中、世界でプレーする**

グローバル化の流れは避けられません。いろんな国々と連携して、さまざまな価値を創り出しながら、共に生きていく覚悟を持つことです。それぞれの国にはそれぞれの得手があります。我々も得手をはつきりさせ、それを徹底的に磨きあげるしかありません。

**ヘンリー・フォード 顧客に何が欲しいか聞いたら、もっと速い馬がいいと答える  
DVD ビデオデッキが前提であれば、もっと速く巻き戻してきればベターとなる  
その延長線上に、自動車・DVDは存在しない 絶対という視点を極力相対化する  
顧客には未来を想像する助けを求めない、期待しない 果報は練って待つしかない**

市場が激変し、顧客の欲するものはますます見えなくなっています。顧客に聞いても、顧客自身が自らの欲するものを明確に語れなくなっています。顧客に頼っていけないことは昔も今も同じです。自らの手と足と頭で、ウォンツを掘り起こしていくしかありません。



学びをせんとや生れけん



平安時代末期以降の一―二世紀後半から一二世紀にかけて、当世風(今様)の俗謡、民謡、和讃などは下層階級にあたる老若男女に広く歌われましたが、武士階級や、上層階級の貴族、皇族の一部にも親しまれ、後白河法皇のように編者として、積極的に関わる支持者も存在しました。この時代は、乱世でもあり、生死の間をさまよう大変な時代でありましたが、一方で、管理とは無縁であり、ひたすら自由意志で生き抜くという、人間の本能に向き合った生き方をするしかなかったのかもしれない。その中で、必死に食い扶持を求め、時に遊び、学ぶ生き方を貫き通したところに、生きることの原点を見る思いがします。その思いのもとに、「学」の九十文の中から、抜粋して三つを紹介させていただきます。

**巨財を築いた大阪商人** あらゆる道楽をし尽くし、究極の道楽は学問

**自分の人生、心から納得したい** お金があるだけでは、往生できない

**学問は** 自らの身を守り、他人さまを助ける術 人生を味わい尽くす

**着物も人生も** 時間をかけてこそ、身に馴染む それを最上と心得る

浪速の大商人は、使い切れないほど稼ぎ、寄付し、大いに遊んだと聞きます。遊んでも遊んでも稼いだお金が増え続ければ、とても使い切れません。そうなると、道楽も行くところまで行き、最後の到達点は学問。ある意味では、お見事というほかありません。

**トレーニング、意識的に身体をいじめる** 食うための肉体労働、無意識に労わる  
**双葉山、初代若乃花、鉄腕稲尾** だからこそ、彼らはあんなにしぶとく強かった  
**身体を労わること** これが、身体活動の、効率化と強靱さと粘りをつくりあげる  
**仕事はアウトプットが命** 食うための肉体労働は、アウトプットが鮮明に見える

メタボ対策にも手が抜けないから、スポーツジムで身体をいじめ、一時的には充実感に浸ります。その一方、初代横綱若乃花の土俵際のしぶとさや鉄腕稲尾の快投に、人間の肉体の凄さ、肉体労働の神秘さを実感し、それに当時の日本人は感動したのだと思います。

**生物学** 鳥の鳴き声の研究 野を飛び回る鳥、カゴの鳥に比べ自由に見える  
**しかし、研究結果は予想外** カゴの鳥は、鳴き声が複雑 余裕や遊びがある  
**それは、襲われる心配がないこと、エサに不安がないこと** 生き抜く大前提  
**心に余裕があると、遊び心が持てる** はじめて、高度な複雑性に対応できる

現在は、稼いで食べていくだけでも大変な時代です。大空を自由に飛び回る鳥に憧れますが、生物学の研究では、カゴの鳥の方が安全で餌の心配が要らず、余裕たっぷりとのこと。帰る巢が皆にあった時代、巢があつての大空の自由であることを実感します。

大浦勇三（おおうら ゆうぞう）

[oura@office.email.ne.jp](mailto:oura@office.email.ne.jp)

大浦総合研究所 代表

<http://www.ima.jp.or.jp/oura/>

早稲田大学卒業、筑波大学大学院修了。

米国大手コンサルティング会社アーサー・D・リトル 主席コンサルタントを経て現職。主担当領域は、経営改革、経営戦略&情報通信技術（ICT）戦略策定、業務改革／組織改革、研究開発／商品開発マネジメント、ナレッジマネジメント&イノベーションマネジメント、人材マネジメント、コーチング&メンタリング、プロジェクト&プログラムマネジメント、ベンチャービジネス支援等のコンサルティング。

主な著書には、

- ・「イノベーション・ノート」（PHP研究所）
  - ・「IT技術者キャリアアップのためのメンタリング技法」（ソフトリサーチセンター）
  - ・「よいコンサルタンの見分け方、かかり方」（清語会）
  - ・「ナレッジマネジメントが見る見るわかる」（サンマーク出版）
  - ・「図解 ナレッジ・カンパニー」（東洋経済新報社） ほか
- その他新聞、雑誌、ウェブサイトへの寄稿多数

「ビジネス梁塵秘抄（一）」（概説）

著者 大浦勇三

二〇二二年一月 初版 第二刷発行

大浦総合研究所

〒一〇八・〇〇一四 東京都港区芝四丁目一六・一・二〇〇五

◎大浦総合研究所

大浦総合研究所の許可なく複製・改変などを行うことはできません。